

## 埼玉県江南町における神社の祭りと住民参加

松尾忠直\*・今井祥太\*・小原利文\*

菊池 航\*・大塚昌利\*\*

都市でも農村でも、コミュニティの喪失が著しい。かつて、神社は祭事を通してコミュニティの形成、維持に中心的な役割を担っていた。なかでも、夏祭りと秋祭りは氏子総出で、コミュニティを確認する機会の一つともなっていた。

本研究は、埼玉県江南町における神社の祭事がどのように変化し、現在祭りとそれに対する住民の参加状況がどのようになっているかを明らかにするものである。その結果、以下の点が明らかになった。

1. 江南町には旧村社に相当する13の神社があり、さらに境内社が合祀されている。2. 祭りや講は、かつてさかんであったが、第二次大戦後と高度経済成長期を中心に衰退した。3. しかし、復活したものもあり、保存会により児童への継承がはかられているものもある。講もかつてほどではなくなったが、継続されている。4. 祭りが盛り上がり、住民が多く参加するか否かは、総代長をはじめとする役員と、氏子の積極性が深い関わりをもつ。5. 比較的盛大な祭りが行われている事例をみると、1) 氏子総代長の主導力によるもの、2) 総代長を中心とする役員らの努力によるもの、3) 総代長をはじめとする役員らの努力に、新旧の氏子が呼応して盛り上がりを見せているもの、という3タイプのあることが明らかになった。

[キーワード] 1 神社 2 祭り 3 コミュニティ 4 住民参加 5 江南町

### I はしがき

コミュニティの喪失が指摘されるようになって久しく、コミュニティを再生しよう、あるいは創生しようという声は多い。地域の活性化には、コミュニティづくりがまず必要だともいわれる。裏返せばいかにコミュニティが失われてしまったかということである。歴史の浅い都市においてはコミュニティが成立しない、またはつくろうともしない雰囲気があることも事実である。“よそ者”の寄せ集めであるような新しい住宅地域ではコミュニティは煩わしいものであり、あるいは都市化の最前線である「混住化」の地域では、旧来のコミュニティとは別に新住民による新しいコミュニティが形成され、それらが反発しあい、あるいは片方が片方を無視するといった状況もみられる。一方長年にわたって維持されてきた農山漁村のコミュニティも、第一次産業の衰退により、さらに過疎化、高齢化により

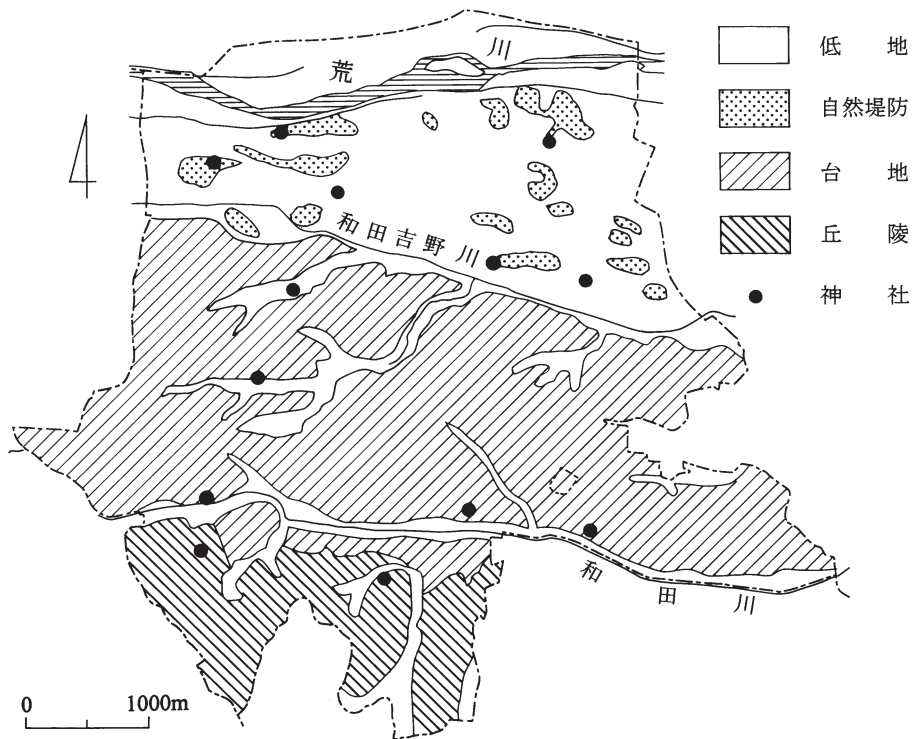
その機能が低下せざるを得ない状況となった。

コミュニティの維持、発展にとって欠かせないものの一つが“近所づきあい”であろう。それが失われたことに問題がある。環境面を中心に、「持続可能な」という用語が用いられはじめてきたが、近所づきあいも持続可能であることが必要であろう。農村地帯でいえば、近所づきあいは狭い範囲ではあるが、行事や冠婚葬祭、農業に関する共同作業などによって保たれてきた。近所づきあいがコミュニティの核になっていたことは確かである。しかし、伝統的な行事は減り、都市化を受け入れ、農業用水路や道路の整備が進み、かつてのように各戸が共同して普請にあたる必要もほとんどなくなった。

神社はそうした紐帯の中心的役割を担ったものの一つであった。神社は新年を言祝ぎ、神に五穀豊穡を願い、また収穫に感謝する場であり、それを祭りという形で具現化させてきた。かつて鎮守の柱に囲まれた境

\* 立正大学・院

\*\* 立正大学地球環境科学部



第1図 江南町の地形区分と神社の分布  
 「立正大学熊谷校地の自然環境に関する資料」による

内は静謐でありながら、一方で子供達の遊び場でもあった。地域の住民にとって、緑に囲まれた神社は単にそこにあるというだけではなく、住民が地域社会の一員であり、祭りに欠かせない露店は子供達にとって数少ない楽しい場の一つであった。祭事は氏子達が一体感を確認する場でもあった。もちろんこうしたことは農村に限ったことではなく、山村や漁村でもそうであったし、長い歴史をもつ都市でも、神社は同様の役割を担ってきた。しかし神社がもつそうした雰囲気や機能が、次第に失われてきた今日、コミュニティの再生を探るうえで、神社と地域住民の関わりの現状を明らかにしておくことも必要であると考え。

コミュニティが、神社の祭りによってのみ再生、創生されるものではない。しかし、かつて神社が祭りを中心にその役割の一端を担っていたことを考えれば、

そこから再生や創生の手がかりを得られるかもしれないと考えることもできよう。著者の一人は、諏訪地方においてマキ（一族）や地区神、生業神などの小宮の御柱祭があってこそ、諏訪大社の御柱祭があれだけの盛り上がりを見せるという、祭りとコミュニティの関係を述べたことがある（大塚，1997）。本論は、旧住民と新住民が混住する地域を事例に、祭りと住民参加の状況を明らかにしようとするものである。

調査にあたっては、埼玉県江南町を対象とした。江南町は埼玉県北部に位置し、東流する荒川を挟んで北は県北部の中心都市である熊谷市と接している。荒川に沿って一部に下位段丘を伴う沖積低地（荒川氾濫原）が東西に並行し、それより南は標高50～60mの江南台地から、70m前後の高度をもつ比企丘陵へ続いている（新井・島津・鈴木，2002）（第1図）。米麦と養

蚕を中心とする農業地域としての性格を有してきたが、高度経済成長期以降工場の進出もあり（大塚，1987）、近年は熊谷市からの都市化の影響を受けて新住民による住宅地化の進展もみられる地域である。したがって祭りと地域住民の交流の現状を明らかにする上では好適な地域である。

江南町をはじめとして、埼玉県北部の神社についての研究や調査は多い。『埼玉の神社－大里・北葛飾・比企－』（埼玉県神社庁神社調査団，1992）は、各神社の歴史、信仰、氏子についてまとめたもので、江南町の神社もこのなかに含まれている。また、『江南町史』（江南町史編さん委員会，1996）も江南町の神社の性格や行事、祭礼等について詳述している。このほかにも、埼玉県の神社について述べたもの（下田，1919）、（埼玉県神職会大里郡支会，1984）、（黒川，2000）がある。

地理学の分野でも、神社に関する研究は早くから、また幅広く行われてきた。紙数の関係から関東地方における近年の研究に限るが、松井により信仰圏に関する研究（松井，1995）、（松井，1999）が行われており、それらはほかの研究結果と共に『日本の宗教空間』（松井，2003）にまとめられている。また、神社信仰を重層性という視点から明らかにしたもの（梅山，1984）や、秩父地域における三峰信仰の展開を、木材生産という生業と信仰の関連から明らかにしたもの（三木，1996）、御師集落のもつ観光的機能を明らかにしたもの（大村他，1986）などがある。これら以外にも信仰圏、鳥居前町や宗教都市などの宗教集落、山岳宗教など広い分野にわたって研究されている。

歴史地理学会は宗教文化の歴史地理学を共同課題として、引き続き同名のシンポジウムを開催し、その特集号を刊行した（歴史地理学会，2005）その内容については、ここでは省略する。しかしそれらを含めても、神社とコミュニティ、とりわけ祭りと地域住民の参加という観点からみたものはそれほど多くはないといってよい。信仰の受容形態として宗教行事をとりあげた

ものもあるが（松井，2003）、それ自体を研究の目的としたものではない。

なお、江南町については立正大学北埼玉研究センターにより、都市化と生産システムの変化についての共同研究が行われており、松井（1986）が人口変動と宅地化、澤田（1986）が農業構造の変化、大塚（1986）が工業の立地形態、小川（1986）が社会的施設の立地集積についてまとめたものがある。

調査にあたっては、神社とその周辺を含めた地域の景観調査を行うとともに、12の神社の氏子総代や役員、宮司などに聞き取り調査を行った。

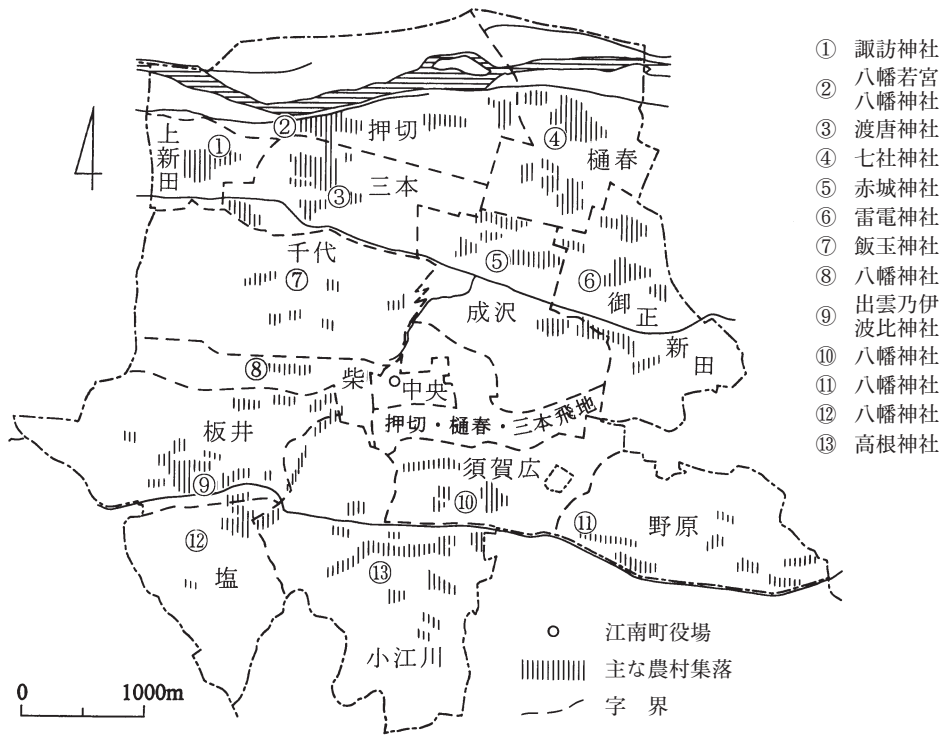
なお、旧村社格の神社や境内に祀られている末社以外にも地区（旧村）の下部組織である組<sup>1)</sup>が祀る神社があり、祭事も行われていた。しかし現在ではそれらはほとんど行われなくなった。また、多くの家には屋敷の裏手など、鬼門にあたる北西側に屋敷神を祀る小祠があり、これ以外にも個人が所有する祖霊社もあるが、これらも本論では対象外とした。

## II 集落と神社の立地形態

### 1. 集落の立地形態

江南町の人口は2004年に12,291、世帯数は3,993で、これをほぼ10年前の1995年と比べると、人口は12,408人からやや減少し<sup>2)</sup>、世帯数は3,636から357世帯増加している。産業別就業人口では第一次産業は7.7%にすぎず、第二次産業が35.4%、第三次産業が56.9%となっている（2002年）。江南町は1955年に御正・小原2村が合併し、1985年に町制に移行した。町制施行当時は人口が1万人を超え、その後も自然増加、社会増加ともに増加していた（松井，1986）。また、高度経済成長期からは町の主要産業であった農業にも変化が生じ、農外就労や兼業農家増が進み、一方未耕作農地の増大、農業経営の粗放化などが進んでいた（澤田，1986）。

現在の江南町は、1889（明治22）年の市制町村制施



第2図 江南町の集落と神社の分布  
2.5万分の1地形図より作成

行以前は13か村からなっていた。この旧村の範囲と村名が、中央部の2地区を除いて、ほぼそのまま現在の大字の区域と大字名になっている。第2図は主な農村集落と神社の分布を示したものである。これを第1図と比べると、北部の低地では古い集落は主に列村状または塊村状に、自然堤防上を中心に形成されていることがわかる。

和田吉野川と和田川の間は江南台地で、畑地と平地林が卓越している。集落は台地内の浅い浸食谷に向かって傾斜する台地端に帯状に延びる形態が主である。台地上のほぼ中央部で、役場が位置する中央地区と隣接する押切・槌春・三本飛地の区域は、長い間村民の入会地であった。そのため平地林が残されてきた地域で、合併後に新しい役場がこの地に建てられたほか、近年はスーパーマーケットやホームセンターなどの商業施設が進出する一方、新しい住宅地が形成され、江南町

の中心をなす地区となっている。また、台地上を中心に埼玉県畜産試験場（この場所は熊谷市の飛び地となっている）、ゼクセル江南工場、ゼリア新薬、立正大学、県立看護学校、療養所、老人福祉センターなどがあり、さらに台地の北西端にはゴルフ場というように、広い敷地を求めた諸施設が立地している（小川，1986）。

台地の南に続く比企丘陵では集落はあまりみられず、塩地区と小江川地区の丘陵端に帯状の集落が形成される他は、小集落が散在する程度である。丘陵地内はほとんどが林地で、樹枝状に丘陵を刻む谷の谷頭部にため池を設けて、その下流部に細長く水田が延びている。

## 2. 神社の立地形態

江南町的主要な神社は13社を数えている。13の大字（地区）に1社ずつとなっており、これらはかつての村社であった。13社のうち6社が低地に、5社が台地

上、2社が丘陵地に立地している。創建年は中世以前が7社、近世に2社で、残りははっきりしない。

これ以外にも多くの境内社がある。これらの大部分は旧村内にあったもので、現在では旧村社の境内に合祀されている。なお、本論では以後各大字の鎮守である旧村社に相当する神社を「本社」とし、合祀されている小社を「末社」とする。

第1図・第2図に示したように、荒川沿いの低地では、本社は古い集落がある自然堤防上、またはその近くに鎮座している。雷電神社のみがやや集落から離れているが、神社のみが孤立しているわけではなく、民家に接している。低地に鎮座する神社の社叢は、それほど豊かではない。

台地上の本社も集落に近接しており、台地麓に沿って帯状に延びる集落の端に立地する傾向が認められ、神社をとりまく樹木は比較的豊かである。千代にある飯玉神社は台地内の低地にあり、「お池」と呼ばれる沼があって、神の使いである魚が棲むと伝えられるが、灌漑用水源となっている。なお、かつて入会地であった中央と押切・樋春・三本飛地の2地区には神社はない。

丘陵地にある本社は小江川の高根神社と塩の八幡神社だけである。この2社はかつてはより南にあったが、参拝に不便であることから江戸時代に現在地に移し替えられたという。丘陵地内にあることから、境内と周囲には多くの森が残っている。

なお境内の樹木、いわゆる社叢の杜を構成する樹種はヒノキとスギが多く、8社でヒノキが優勢であった。また神社の入り口などにはクスに混じってサクラやカエデなどが植えられている。

### III 神社と氏子の特性

#### 1. 本社の特性

江南町における13社の神社名、祭神、末社名、講の状況を示したのが第1表である。本社では八幡神社が

4社あり、八幡若宮八幡神社も八幡宮と若宮八幡が合祀されたもので、これを加えると5社となる。しかしこれらの神社間には特別なつながりはなく、江南町の神社相互間での関係もみられない。それぞれが独立した神社であるといつてよい。祭神も八幡神社は譽田別命で共通するが、それ以外はまちまちであり、多くの祭神を祀る神社もみられる。諏訪神社の祭神は建御名方命であるが、諏訪大社との特別な関係はみられない（聞き取り調査による）。

赤城神社は新田氏が崇敬した赤城神社との関連が推測されている。雷電神社も北関東に多いが、御正新田の雷電神社は京都上賀茂神社から分霊を奉戴しており（埼玉県神社庁神社調査団、1992）、必ずしも多くの神社にとって関東諸社との関連が強いとも言い切れない。七社神社は七柱の神を祀ったことに由来している。

#### 2. 末社の特性

ここでいう末社は、明治期の神社法により一村一社制がとられた折に、旧村社の境内に合祀されたり合祀された、小さな神社のことである。赤城神社のように10の末社を置くものから、2社をもつ神社までさまざまである。末社は全部で70社を超えており、本社の13社中9社が5社以上の末社を祀っている。このことは、明治期の合祀以前にはこの地域にもかなりの神社があったことを示しており、明治～大正期に埼玉県内の神社が減少したこと（黒川、2000）とも一致する。末社のなかでも、琴平神社や八坂神社などは、多くの本社内に祀られている。

これら末社にとっての本来の本社（江南町の旧村社にあたる本論でいう本社とは別）は遠方にあるものもあるが、三峰神社、武州御岳神社、榛名神社、阿夫利神社のように関東に鎮座する神社を本社とするものもある。長野県の諏訪地方では、諏訪大社である大宮とそれ以外の小宮との間に関連をみることができ（大塚、1997）、住民が大宮の氏子であると同時に小宮の氏子でもあって、そこに「御柱祭」を通じてのコミュニティ

第1表 江南町における神社の祭神・末社・講（2003年）

	大字名	神社名	祭神	末社	講
1	上新田	諏訪神社	建御名方命	女諏訪社・天神社・琴平社	(大山講)
2	押切	八幡若宮 八幡神社	譽田別命(主神) 仁徳天皇(相殿神)	神明社・稻荷社・戸隠社	手長講・三峰講 (伊勢講・大山講・榛名講)
3	三本	渡唐神社	少彦名命	駒形神社・三峰神社・ 順海神社・八坂神社・ 巖島神社	大山講・榛名講・三峰講 (伊勢講)
4	樋春	七社神社	大日貴命・譽田別命・天兒 屋根命・大山祇命・別雷命 大斗邊命・倉稻魂命	天神社・天乃手長男神・実朝社 坂田稻荷・茂木稻荷	榛名講・三峰講・宝登山講 (伊勢講)
5	成沢	赤城神社	大日貴命 豊城入彦命	津島神社・熊野神社・天神社・ 稻荷神社・天満社・愛宕社・ 山口神社・琴平神社・大雷神・ 三峰神社	三峰講 (大山講・手長講・榛名講)
6	御正 新田	雷電神社	別雷命	八坂神社・粟島神社・天神社・ 山神社・稻荷社・白山社	(伊勢講)
7	千代	飯玉神社	豊受姫命	三峰神社・八坂神社・天満社	榛名講・三峰講 (伊勢講・大山講)
8	柴	八幡神社	譽田別命	大山祇神社・天満社	(伊勢講・榛名講)
9	板井	出雲乃伊 波比神社		八坂神社・瀧田神社・天満社・ 神明社・稻荷社・山神社・	大山講・両神講(手長講・ 榛名講・三峰講・)
10	須賀広	八幡神社	譽田別命	三峰神社・稻荷神社・天満社・ 榛名神社・阿夫利神社・ 御岳神社・巖島神社・白山社	(大山講・御岳講・榛名講・ 三峰講)
11	野原	八幡神社	譽田別命	三峰神社・稻荷神社・天満社・ 雷電神社・鹿島神社・愛宕社・ 山之神社	(三峰講)
12	塩	八幡神社	譽田別命	大黒天・三峰社・山之神社・ 八坂社・稻荷社・大歯神社・ 琴平神社・天手長男神社・ 天満宮・山王社	(三峰講)
13	小江川	高根神社	味鋳高彦根命 伊邪那岐命 伊邪那美命	弥勒神社・三峰神社・稻荷神社 榛名神社・牛頭神社・金毘羅社 山祇神社・八坂神社・諏訪神社 星宮神	(伊勢講・三峰講)

講のうち、( )内は現在では行われていないもの。  
『江南町史』による。講については聞き取り調査による。

の一端をみる事ができるが、ここでは両者の間にそのような関連をみることはできない。ただし、かつて講がさかんであった時代には、三峰講や榛名講を通じて本社と末社との間に重層性が認められることもあった。

末社のなかには、本社の例祭を上回る人出で賑わう例祭が行われているが、これについては章を改める。

### 3. 講組織

江南町の神社に限らず、第二次大戦前までは講はか

なりさかんであった。戦後も存続していたが、その多くも1960年代頃までに次第に衰えていった。第1表に示したように、講は13社すべてで組織されていた。講別では榛名講と三峰講がともに9講でもっとも多く、大山講(6講)、伊勢講(5講)がこれに次いでいた。伊勢講を除けば、いずれも関東の神社の講であった。

講の一員となることは、講がレクリエーションの性格をもっていたとはいえ、信仰心の向上はもとより、連帯感の強化、住民間の交流を深めることにつながる。現在では八幡若宮八幡神社、渡唐神社、七社神社、赤



城神社、飯玉神社、出雲之伊波比神社の6社で、大山講、手長講、榛名講、宝登山講、三峰講、両神講が行われている。

手長講は、江南町の西に位置する寄居町にあって、火防せの神として知られる天手長男神社への参詣である。長瀬町の宝登山神社は、火防せや盗難除けで知られている。かつては伊勢講もさかんであった。講中には大字にほぼ一致する氏子圏に及ぶものと、その下部組織である組ごとに組織される場合もあり、また氏子全員が参加するものもあったが、少人数で代参するというケースが多かった。

講の盛衰は、氏子が神社の祭事に参加する状況のそれに似た傾向をたどった。特に、1960年代以降高度経済成長が進むなかで、農村人口の都市への流出、農村部への工場や商業施設の進出と兼業化の進行、核家族化、レジャーの多様化などによって、その活動も低調になった。このことは共同体組織を弱体化させることとなった。

ただし、Y宮司は近隣市町も含めて、担当する13の神社の氏子を募って、伊勢講、出雲講、熊野講を、毎年1社ずつ行っている。講中は、40名前後の規模となっている。また、出雲之伊波比神社の氏子のなかでは、現在でも秩父の両神講と神奈川の阿夫利神社の大山講が活動している。両神講には18～19名の参加者があり、年に2～3回の集まりも持たれている。また大山講には30数名が参加し、夏には4～5回講中による集会が開催されている。このように現在でも講が行われている例はある。出雲之伊波比神社がある板井地区は、後述するように祭りも盛んであり、特色ある地区となっている。

## IV 氏子と氏子組織

### 1. 氏子圏と氏子数

13社の氏子圏は、ほぼ大字と一致している。これは前述したように各社が旧村社であり、現在の大字が当

第2表 神社の氏子圏と氏子数

	神社名	氏子圏	1990年頃(戸)		2003年(戸)	
			氏子数	世帯数	氏子数	世帯数
1	諏訪神社	上新田	70	89	68	103
2	八幡若宮八幡神社	押切	170	168	168	185
3	渡唐神社	三本	160	190	不明	221
4	七社神社	樋春	153	161	161	200
5	赤城神社	成沢	300	766	182	764
6	雷電神社	御正新田	216	439	185	577
7	飯玉神社	千代	87	152	75	171
8	八幡神社	柴	15	75	13	32
9	出雲乃伊波比神社	板井	150	238	171	371
10	八幡神社	須賀広	80	79	95	82
11	八幡神社	野原	130	180	157	219
12	八幡神社	塩	56	89	56	100
13	高根神社	小江川	不明	381	155	453

聞き取り調査による。

時の村域にほぼ一致するからである。一部で集落(組)が別の旧村域に移し替えられたことによって氏子数が増減した例はあるが、こうした事例は2～3の集落にとどまっている。

神社別の氏子数がわかる最新のものは、2003年の状況である。第2表に示すように、氏子をもっとも多い大字は、雷電神社を氏神とする御正新田で、185戸を数えている。これに次ぐのが、御正新田の西側に位置する成沢地区の赤城神社で、氏子は182戸となっている。以下、板井地区の出雲乃伊波比神社が171戸、押切地区の八幡若宮八幡神社が168戸、七社神社(樋春地区)が161戸となっている。三本の渡唐神社については名簿がないため氏子数は不明であるが、1990年頃が160戸となっており、現在もこれに近いものとすれば、この地区も上位になる。このうち板井を除けば、氏子数が多い地区は比較的大きな集落があり、また集落数も多い荒川沿いの低地に多いことがわかる。

台地上にある集落においては、氏子数からみると出雲乃伊波比神社(板井地区)や八幡神社(野原地区)のように、比較的氏子数の多い地区がある一方、千代や柴のように少ない地区もある。丘陵地においても、

高根神社（小江川地区）と八幡神社（塩地区）では、かなりの開きがある。

氏子数の変化を1990年頃と2003年で比べてみると、樋春（七社神社）、板井（出雲乃伊波比神社）、須賀広（八幡神社）、野原（八幡神社）でやや増加しており、成沢（赤城神社）、御正新田（雷電神社）ではかなりの減少を示している。それ以外はあまり変化がないか、わずかな減少となっている。

氏子数は住民の転出入などによって常に変化している。さらに宗旨替えにより氏子をやめることで氏子数は減少し、あるいは病気を契機に一時的に氏子を離れる場合もある。一方、子女の独立や結婚、新住民の流入によって新たに氏子が増えることもある。ただし町外から転入してくる新住民は、神社がない大字中央とその南から東にかけての地区に多く、それ以外の大字に転入しても氏子になるのは少ないため、氏子の増加にはそれほど寄与していない。あるいは、3世帯が同一家屋内に同居しながら、それを1世帯分としてしまう場合もある。従って氏戸数と世帯数が一致しないこともある。

## 2. 氏子組織

神社の管理や運営、祭事の進行に重要な役割を果たすのが役員会である。基本的には宮司が最上位に位置するが、専従の宮司がいる神社はなく、3名の宮司が複数の神社を兼ねているので、祭事以外に加わることは少ない。実質的な組織の長は総代長である。この下に総代があり、その下に用番があってさらに氏子となる<sup>3)</sup>。

総代は集落ごとに選ばれ、集落の規模によって人数も異なる。用番も同様である。これらが役員組織であり、実質的な祭事の運営組織ということになる。当然ながら集落数や集落規模によって組織の構成員は異なる<sup>4)</sup>。また、集落数が多い地区では用番の下に幹事、世話人をおく場合もある。基本的には総代長の任期は3年、総代は2～3年、用番が1年である。

役員は、ほとんどの氏子組織で持ち回り制であるため、引き継ぎ時に新旧の役員間で祭事の意義がよく伝わらないこともある。あるいは、役員によっては熱意が持続しないこともある。忙しい職業に就いていれば、いたしかたない場合もあろう。しかし、熱意がなく、立場上しかたなしに行うという消極性が、祭りがコミュニティにプラスとなるか、あるいはマイナスに働くかという分かれ目にもなりかねない。

## V 神社の祭事

江南町の神社では、ほぼ似通った祭事が行われている。夏祭りなどに代表されるいわゆる“祭り”については次章で述べることとし、ここではまず神社の祭事全般についてみておく。各神社の祭事暦を示したのが第3表である。

### 1. 本社の祭事

神社の祭事は元旦祭にはじまる。1月は元旦祭以外ほとんど行事はない。2月に入ると末社の例祭や初午祭を行う神社があり、中旬から下旬にかけて祈年祭が執り行われる。4月の中旬から中旬にかけて、春季大祭を行う神社が多くなる。春を迎えて祭事もさかんになり、獅子舞が演じられたり、榛名講、三峰講も行われようになる。

このあと4月下旬から5月にかけては、本社の祭事はあまり行われなくなる。これには、かつて養蚕がさかんな時代にこの時期は繁忙であったため、祭礼の時期をずらしたことが一因となっている。農作業が一段落して6月下旬になると、多くの神社で大祓祭が行われる。

7月は夏祭りの時期である。10月中旬になると、多くの本社で秋季例祭が行われる。夏祭りと秋祭りは、子供を含めた多くの氏子が参加する、神社にとってもっとも賑わいのあるものとなる。11月下旬になると、現在の勤労感謝の日のもととなった新嘗祭が執り行われ、



第3表 江南町における神社の祭事暦（2003年）

神社名と地区名	諏訪神社	八幡若宮八幡神社	渡唐神社	七社神社	赤城神社	雷電神社	飯玉神社	八幡神社	出雲乃伊波比神社	八幡神社	八幡神社	八幡神社	高根神社
月	旬	上新田	押切	三本	樋春	成沢	御正	千代	柴板	須賀	野原	塩	小江川
1	上	元旦祭	元旦祭	元旦祭	元旦祭	元旦祭	元旦祭	元旦祭		元旦祭	元旦祭	元旦祭	
2	上			順海神社例祭	寒神祭初午祭								
	中		祈念祭		祈念祭		祈念祭粟島祭			祈念祭	祈念祭		
	下	祈念祭		祈念祭		祈念祭			祈念祭			祈念祭	
3	上	祖魂祭											
	中												祈年祭獅子祭
	下								不動祭	春大祭			
4	上		例祭ささら獅子舞春日待三峰講	春大祭	春日待	三峰講	春日待	三峰講榛名講	春日待				お獅子様
	中					例祭	春大祭	春大祭		春日待		春大祭	末社祭
	下									庚申祭			
5	上								両神講				
6	下	大祓祭	大祓祭	大祓祭	大祓祭		大祓祭			大祓祭			
7	上												天王様大祓祭
	中							御献灯		八坂祭伏木祭			
	下				津島神社(天王)祭	夏祭(灯笼祭)				不動祭大山講		前夜祭雷電神社例祭	諏訪祭
8	上	初寄合											
	下	秋大祭	大祭					御献灯					
9	下			祖霊祭									
10	上								秋日待				
	中		秋大祭	秋大祭	秋大祭	前夜祭秋大祭	秋大祭	秋大祭		秋日待	秋大祭		
	下										秋大祭	秋大祭	秋大祭
11	中								新嘗祭			伊勢参	
	下			新嘗祭	新嘗祭	新嘗祭	新嘗祭			新嘗祭	新嘗祭	新嘗祭	
12	上	新嘗祭	新嘗祭御手長講							氷川祭竈注連裁			神宮大麻神璽頒布祭
	中										竈注連裁	大祓祭	
	下	大祓祭	大祓祭	大祓祭	大祓祭	竈注連裁大祓祭	大祓祭	大祓祭	大祓祭	大祓祭	冬至祭大祓祭	大祓祭	大祓祭

雷電神社の地区名の「御正」は御正新田の略。宮司の都合などにより、開催日は年により変更されることがある。聞き取り調査による。

第4表 S宮司の年間祭事暦（江南町内分，2003年）

月	日	祭事内容	月	日	祭事内容	
1	1	元旦祭（A・B・C・D・E社）	7	27	例祭準備（E社）	
	2	元旦祭（F・G社）		28	例祭（E社）	
2	1	例祭（Dの末社）	8	第3金曜	例祭準備（B社）	
	2	例祭（Aの末社）		第3土曜	例祭（B社）	
	15	祈年祭（D・E・Eの末社）	9	23	例祭（A本社）	
	17	祈年祭（G社）		10	14	例祭準備（C社）
	19	祈年祭（C社）			15	例祭（C社）
	第3日曜	祈年祭（A・B社）		16	秋日待（F社）	
28	祈年祭（F社）	19	秋日待（E社）			
3	初午	祭礼（Cの末社）	11	第3日曜	例祭（A・D社）	
	21	祭礼（Bの末社）		23	新嘗祭（A社）	
4	2	例祭（C社）	12	25	新嘗祭（G社）	
	3	春日待（C・D社）		27	新嘗祭（D社）	
	第1日曜	春日待（A社）		28	新嘗祭（F社）	
15	例祭（G社）	12		1	新嘗祭（B・C社）	
6	30		大祓祭（A・B・C・D・E・F・G社）	31	大祓祭（A・B・C・D・E・F・G社）	

執り行う日時，神社は，年により変更がある。聞き取り調査による。

収穫できた農作物に感謝する。また，11月になると伊勢講や御手長講が行われるようになり，12月は一年を締めくくる竈注連<sup>かまじゆきり</sup>と大祓祭が行われる。竈を清め，一年の罪穢れを祓う儀式を終えて，新しい年の元旦祭を迎えることになる。

## 2. 末社の祭事

末社の祭事は本社の祭事が少ないときに行われるという傾向がみられる。そのなかで最大の特徴は夏季例祭，すなわち夏祭りである。その時期は，7月の中旬～下旬に集中している。以前に比べれば消滅した行事もあり，あるいは規模を縮小したものもある。しかし若者や子供たちもが参加するものとして，本社のそれを上回る規模の祭礼が行われることもある。その具体例については後述する。

## 3. 宮司と祭事

宮司がどの程度祭事に関わっているかも，神社の祭事状況を知るうえで参考になる。江南町の神社では，上述したように3名の宮司がいくつかの神社を兼ねて祭事にあたっている。このうちの2名は江南町在住で，

1名は寄居町に居住している。第4表は宮司の一人であるS宮司の年間の祭事活動を示したものである。表からもわかるように，これだけで年間1か月を超える日数を割いていることになる。元旦祭や大祓祭では，1日に5～7社を掛け持つという状況である。このほかにも，ある集落の10軒ほどが行う氏神の祭事にも関わっている。さらにこの宮司は，江南町以外の近隣の神社も担当しており，実際にはかなりの日数で祭事に関わっていることになる。このように宮司はかなり忙しく，その結果実質的な祭事は総代長や総代が取り運ぶことになる。

## 4. 住民の祭事への参加状況

役員以外の氏子が神社に関わるのは，主婦やゲートボールクラブのメンバーが神社の清掃や草取りを行うなどの自発的な活動を除けば，例祭への参加が中心となる。しかし1960年代頃からは全員が参加するのではなく，各戸から1名が参加する程度になっている。

祭りに対する住民の参加状況を第5表に示した。1社については回答が得られなかったが，すべて旧住民という神社が1社あり，大多数が旧住民という神社が

第5表 神社の祭りと住民参加の状況（2003年）

神社名	氏子圏	主な祭事など	住民の参加状況	付帯施設
1 諏訪神社	上新田	「屋台囃子」（かつて太鼓・踊りも付随）、薬師堂祭、屋台囃子保存会で後継者育成、板橋区の小学生とホテル交歓	大多数が旧住民	公民館（社務所）
2 八幡若宮八幡神社	押切	秋季大祭の「獅子舞」・「棒遣い」（かつて「お不動様」「お獅子様」の村回り）	旧住民と新住民が参加	公民館（社務所）
3 渡唐神社	三本	順海祭＝火防信仰（かつて神楽あり）	大多数が旧住民	集会所（社務所）
4 七社神社	樋春	春季・秋季大祭の「団子投げ」	大多数が旧住民	集会所（社務所）
5 赤城神社	成沢	末社津島神社例祭の「屋台囃子」（かつては「屋台曳き回し」・「神輿渡御」）、縁日には露店、子供たちが囃子を伝承	大多数が旧住民	集会所（社務所）・神輿庫ゲートボール場・滑り台・ブランコ・屋台小屋
6 雷電神社	御正田	「獅子飾り」（かつては夏季大祭で「獅子回し」、灯籠祭）獅子は現在では飾るのみ	大多数が旧住民	農業生活改善センター（社務所）・ゲートボール場
7 飯玉神社	千代	「お日待団子」の配布		社務所
8 八幡神社	柴	（かつて芝居興行が行われた）	旧住民のみ	社務所・祭器庫ゲートボール場
9 出雲乃伊波比神社	板井	（かつて八坂祭で「神輿渡御」・庚申祭）「橋くぐり」信仰	旧住民と新住民が参加	社務所・神輿庫・山車庫・ゲートボール場
10 八幡神社	須賀広	秋季大祭の「ささら（獅子舞）」現在は数年に一度	旧住民と新住民が参加	公民館（社務所）
11 八幡神社	野原	「お日待団子」の配布（かつては一戸ごとに配られた）	旧住民・新住民すべてが参加	集会所（社務所）
12 八幡神社	塩	（かつて「お獅子様」村回り、「団子撒き」）	大多数が旧住民	公民館（社務所）・ゲートボール場
13 高根神社	小江川	「獅子祭」（かつて「団子撒き」）	大多数が旧住民	集落センター（社務所）

（ ）は、かつて行われていたもの。  
聞き取り調査による。過去の状況については『埼玉の神社－大里・北葛飾・比企－』による。

7社で、12社中8社は旧来の住民によって祭りが行われるという状況になっている。一方新住民も参加する祭りは4社にすぎない。ただし、新住民の居住がほとんどみられない地区もあり、このような地区では当然旧住民だけで行うということになる。したがって一概に新住民は祭りに参加しないというように決めつけてしまうことはできない。

氏子の祭事への参加は低下する傾向にある。家族総出での参加は減少し、氏子総代や役番などの役員が氏子を代表して祭事を執り行うという状況になっている。春・夏・秋の例祭にも全氏子に参加を呼びかけているが、参加率は芳しくないのが現状である。

新住民が氏子組織に参加する比率は決して高くないが、しかし地域によってはかなりの新住民が氏子料を

納入しているところもある<sup>5)</sup>。このように、少なくとも新旧住民などと呼び分ける必要のない地域社会が生まれているところもある。

次章では祭事を通じてコミュニティが再生されつつある具体的な事例を示して、祭りと住民参加の現状をみることにする。

## VI 祭りと住民参加

### 1. 祭りの消長

各種の祭事の中でも、もっとも大きな意味合いをもつのが夏と秋の“祭り”である。13の神社についてその状況を第5表に示した。

祭りといえば、囃子とともに山車が集落内を練り歩

き、獅子が舞い、供物が振る舞われ、あるいはアセチレンガスを灯した露店には、子供たちが群がるという光景が、ごく普通であった。また、広い境内のある神社では小屋掛けの芝居が立ち、映画が上映されることもあった。

しかし、第二次大戦後の混乱期と高度経済成長期を中心に担い手が減少し、テレビの普及、趣味やレクリエーションが多様化するなか、次第に廃れあるいは規模を縮小せざるを得なくなったものが多い。ただしその後復活したものもあり、今後の活動が楽しみなものもある。

コミュニティという面から見れば、こうした祭りに地域住民がどのように参加しているかが重要である。第5表に示したように、祭りに対する住民の参加状況はまだまだ大多数が旧住民であり、新住民が参加するケースは少ない。そこで以下において、まずかつての祭りの状況と現在の状況を概観し、次に比較的祭りが盛会に行われている3社の祭りについて、具体的に述べることとする。

## 2. 往時の祭り

江南町の神社の祭りでも、例えば雷電神社や高根神社、塩の八幡神社では獅子舞が集落を練り歩き、灯籠祭が行われたり、あるいは団子撒きが行われていた。しかし、現在は雷電神社では獅子頭を飾るだけになっている。団子撒き（団子投げ）はこの地方の多くの神社で行われていたもので、このほかにも七社神社、飯玉神社、野原の八幡神社でもみることができた。かつては氏子の家を1軒ずつ回って配ることもあったが、今ではそれも廃れてしまっている。

柴の八幡神社では芝居が興行されたこともある。また、八幡若宮八幡神社では、鉦をたたきながら不動明王像の画軸をもって氏子の家々を回り、無病息災を祈る行事も行われていた（埼玉神社庁、1992）。

## 3. 現在の祭り

かつてさかんであった祭りも、今日では往時ほどの規模ではないが、全く失われてしまったわけではなく、小規模ながらも行われたり、また復活されたものもある。現在、以下のように13社のうち11社で各種の祭りが行われている。

- ①諏訪神社：大祭が行われている。この祭りについては後述する。
- ②八幡若宮八幡神社：10月15日の秋季大祭に獅子舞が奉納される。同時に棒遣いが演じられる。
- ③渡唐神社：火防せの加持祈禱を行ったとされる順海法印に因んで、2月2日に火防祭が行われる。
- ④七社神社：春季大祭と秋季大祭に、団子投げが行われる。氏子が持ち寄った米で団子を作り、拝殿の高所から投げる祭りである。
- ⑤赤城神社：末社である津島神社の天王様の祭りである。この祭り囃子は、町の無形文化財に指定されており、後継者育成のため、町の教育委員会から保存会に対して、補助金が支給されている。この祭りについては後述する。
- ⑥雷電神社：獅子が飾られる。
- ⑦飯玉神社：祈年の日待ちに団子が配られる。
- ⑧出雲乃伊波比神社：天王様の祭りで、正式には末社である八坂神社の八坂祭である。この祭りについては後述する。
- ⑨八幡神社（須賀広）：10月の秋季例祭に奉納されるささら（獅子舞）が行われている。江南町の伝統行事のなかでも有名なものの一つである。1996年に「ささら獅子舞保存会」が結成され、70名の会員が会費を納めるとともに、町の無形文化財にも指定され、助成金が支給される他、寄付金によって運営されている。
- ⑩八幡神社（野原）：祈年の日待ちに団子が配られる。
- ⑪高根神社：獅子祭りが復活した。悪病除けと五穀豊穡を祈願するもので、上尾市の八枝神社から借りたお獅子様と呼ばれる唐櫃を担いで、地区内を回るも

のである。

#### 4. 祭りと住民参加の事例

住民の参加があつてこそその祭りである。しかし住民が率先して祭りを運営するのには、何かと困難が伴う。どうしても氏子代表である役員に負担がかかることになる。そして役員の努力と住民の一体感が、祭りの盛り上がりや左右することになる。現地調査を通じて、盛会の祭りには役員と住民参加に3タイプあることが認められた。最後に、それぞれの祭りや住民の参加状況を、3社社の事例を通してみることにする。

##### 1) 津島神社の夏祭り

###### ー役員が主導する祭りー

旧住民を中心とした祭りの事例である。津島神社は、成沢地区の鎮守である赤城神社に合祀されている末社である。赤城神社は『新編武蔵国風土記稿』にもみられる古い神社である。成沢地区は、ほぼ中央を和田吉野川が流れ、その北部には農村集落と水田地帯が広がり、南部は台地で一部に新興住宅地が形成されている。神社は、和田吉野川に近い宿集落の西端に位置している。

津島神社の祭礼は天王様と呼ばれ、7月24日に行われるもので、成沢地区の夏祭りでもある。かつては神輿や山車が地区のなかを巡回していたが、担ぎ手である若者の減少や交通規制、また交通安全への配慮もあつて、神社の境内に飾るだけとなった。しかし、子供たちによる祭り囃子が山車の上で奏され、境内には10店を超える露店も出て、氏子や親戚の人々に賑わいをみせる。菓子が配られるほか、隣接する当地区の集会所ではお祓いを終えた宮司や役員に氏子も加わって、団らんのひとときが持たれる。境内には滑り台やブランコがあり、隣接してゲートボール場も設置されている。

赤城神社の氏子も減少傾向にある。成沢地区は宿、入郷、坂上の三集落からなっており、以前はここに住むほぼ全員が氏子であった。宿・入郷地区は農村的集

落景観を残しているが、坂上地区には新住民が居住するようになっている。

この神社の祭りは、役員たちの努力によって支えられており、氏子中心の祭りであるといつてよい。祭りには新住民も訪れるが、しかし氏子にはなっていない。新旧住民の交流の一つの機会でありながら、旧住民による祭りという段階に止まっている。露店も、新住民が訪れやすいようにという配慮からである。ただしこれに関しては、役員たちがまず旧住民の連帯感を強めることを目指し、とりえず神社に足を運んでくれればよいという姿勢がある。

参加者は決して多いとはいえないが、露店があつて、子供たちの高声と太鼓の音が祭りを盛り上げているのも、失われかけた日本の原風景を思い起こさせている。その意味では、この祭りが果たしている役割は大きい。

##### 2) 諏訪神社の夏祭り

###### ーリーダーの主導による旧住民中心の祭りー

ここで取り上げる祭りは、総代長の主導力によって盛り上がりやみせるようになった例である。諏訪神社は江南町のもっとも北西側にある上新田地区の鎮守である。集落は荒川に並行して寄居方面に通じる道路に沿い、集落の周辺には畑地が広がる農村地帯である。境内には、埼玉県の補助金により建築された公民館がある。無料で使用でき、地区住民の寄り合いなどで活用されているが、諏訪神社の社務所としても利用されている。

この神社の祭事も、他の神社と同じように次第に簡略化され、氏子の参加も低調になってきていた。しかし、新しい総代長の誕生により変化がはじまった。諏訪神社は、本来は上新田の柴田家が造営した個人の神社であった。社伝は「おだいかん」の屋号をもっていた柴田家の祖先である柴田信右衛門豊忠によって、1746(延享3)年に創建されたと伝えている。後に集落の鎮守として崇められるようになった。

諏訪神社の秋季大祭は、かつて10月に行われていた



が、氏子が参加しやすくなるように、夏祭りを兼ねて8月下旬の土・日曜日に行われるようになった。初日は早朝から多くの氏子が参加して境内の草取り、拝殿の式典準備や山車の飾り付けが進められ、一方集落内の道路に沿って提灯が設置される。また、女性によって万燈花と呼ばれる和紙で作った花が飾られる。夕方から夜祭典となり、氏子総出で祭典が行われる。灯籠に灯がとまり、山車が地区のなかを巡回し、屋台の上では子供たちが囃子を奏でる。金魚すくいや、むさし江南音頭などの曲に合わせて踊りがはじまり、近年はカラオケ大会も開催されるようになった。翌日は本祭で、早朝宮司と氏子総代長、総代等の役員が本殿に集まって儀式が行われ、祭典が行われた後、午後には役員が改選され懇親会となる。

祭礼で行われる屋台囃子は、郷土芸能として「諏訪神社屋台囃子保存会」によって引き継がれており、毎週小学生による練習が続けられている。保存会の運営費は氏子から徴収されている。

このように、諏訪神社を中心に地域住民が交流を深めるようになった背景には、現総代長が発揮した強力なリーダーシップがあった。総代長は世襲制であるが、現総代長は地元の有力者でもあり、就任すると住民の諸事への参加意識の低さを感じ、改革に乗り出した。その結果、ほとんどの住民が地域清掃にも参加するようになり、さらに米の減反政策に伴って生じた休耕田にコスモスを植え、10月19日には上新田コスモス祭りが開催されるようになった。コスモス祭りは、上新田以外の地域から人々を呼び込むためのイベントであるといってくよく、清涼飲料水や豚汁、餅などが配られる。こうして神社の祭りだけにとどまらず、行事が増えて地域住民の参加は広く行われるようになり、失われかけていたコミュニティは再生されるようになった。

「地域に生まれた人は、地域の結びつきを大切にすることがある。それは災害時などの協力にも生きてくる。神社の祭りや行事も地域文化であり、その延長線上にある」とする総代長の思考・行動力が、地域社会を再

生させたといってもよい。リーダーの存在と、それを受け入れた住民（氏子）の連帯が地域を甦らせた一つの好例といえよう。ただし、ここでも新住民の参加は、その数が少ないとはいえ、ほとんどみられないのが現状である。

### 3) 出雲乃伊波比神社の夏祭り

#### －新旧住民が交流する祭り－

出雲乃伊波比神社がある板井地区は、台地上にあって江南町ではもっとも西に位置する地域である。しかし、熊谷市から小川町を経て秩父地方に至る道路、あるいは寄居町に至る道路が通じている。したがって開けた土地であり、役場をはじめとする町の中心部にも近接している。古くからの集落に加えて、新住民の居住もみられる地域である。

出雲乃伊波比神社の創建も古く、氏子からは鹿嶋様と呼ばれて親しまれてきた。はしか除けの神様として近隣に聞こえており、神社の前を流れる和田川に懸かる神橋をくぐると、はしか（橋下）除けの祈願になると伝えられてきた。

この地区でも祭事に参加する氏子は次第に減少してきていた。そこで総代長たちが中心となって、伝統文化と住民の交流の場を守るために立ち上がり、その熱意が住民たちの参加を促し、消えていた伝統を復活させた。復活をみた行事は、夏祭りである八坂祭りの神輿とヒバリ囃子である。諸病を追い払う祭りとされる八坂祭りには、板井地区のほぼすべての氏子が参加する、出雲乃伊波比神社の祭事の中でももっとも盛り上がりを見せる行事である。一時途絶えていたが、20年ほど前に復活したもので、35歳くらいまでの若い氏子が神輿を担ぎ、子供たちが山車を引いて各集落内を回るようになった。この神輿には賽銭箱がつけられている。これを藪奉賀といい、集まった賽銭は八坂祭りの費用に充てられる。

ヒバリ囃子は神社の祭事とは別に復活をみたもので、ヒバリ囃子保存会が結成されている。毎月4日間練習

し、八坂祭りの山車曳航に加わって祭りを盛り上げるほか、各種のイベントにも参加している。

板井地区に住むようになった新しい住民も、毎年元旦の「仲間入り」によって氏子として迎えられ、古くからの住民と一緒に祭りに参加している。江南町には「板井から日が昇って、日が沈む」という言い習わしがあるという。仲間意識が強いと伝えられており、そうした土地柄がこの地域の一体感を生み出しているといえるのかもしれない。

この事例は、住民の積極性が祭りを盛り上げるという好例である。役員はもちろんのこと、氏子全員が祭りの重要性を認識し、なんとか祭りを盛り上げたいと思っている。前述したように、この地区では今日でも講に参加する人たちが多く、両神講は18～19名が参加し、年に2～3回の集まりをもつ。大山講には30数名が参加し、7～8月の土・日曜日にも集会を開いて親睦を深めている。氏子達によるこうした講中の活発な活動も、神社の祭りを支えているとみてよいであろう。

## Ⅶ むすび

かつて神社がコミュニティの紐帯の一端を担っていたこと、現代においてもその役割は必要であろうということから、埼玉県江南町の神社の祭りとそれに対する住民の関わり方をみてきた。それらを要約すれば、以下のようなろう。

1. 江南町には13の地区（旧村）に13の神社（旧村社、本論では本社とした）があり、かつて地区内の各所に鎮座していた小社が、明治期以降末社として本社内に合祀されている。
2. 祭事は、本社だけでなく末社においても行われ、かつては夏祭り、秋祭りに付随して、芝居が上演されたり、郷土芸能もさかんであった。しかし、この地域も他地域と同様、第二次大戦後や高度経済成長期以降廃れあるいは縮小し、祭り自体も行われなくなりあるいは衰微した。

3. 講もかつてはさかんであった。講数や構成員数は減少したが、現在でも6社において行われている。ただし、ほとんどが代参である。講中は近所づきあいの代表的な「組織」の一つであった。現在でも講活動が活発なところでは、夏祭りも盛況である。講中の連帯感が地域住民の交流の基盤になっているともいえよう。とはいえ、過去に講があったからといって、それを復活させたり、拡大するには無理であろう。しかし、こうした住民の連帯が、近所づきあいを維持させていることは間違いのないであろう。

4. すべての神社に専属の宮司はおらず、3人の宮司がいくつかの神社を兼ねている。各神社とも総代長、総代、用番等の役員組織があり、この組織が神社の運営に果たす役割は大きい。

5. 多くの住民が参加する夏祭りについて、活気があるものをみると、その主導性に三つのタイプが認められた。それらは氏子の祭りに対する姿勢の違いによるものであった。一つは、まずは旧住民の連帯を維持することを目的に役員が努力しているもの。二つ目は、コミュニティが災害の発生時などに重要な役割を果たすという考えのもとに、総代長が強いリーダーシップを発揮した結果、祭りもさかんになり連帯感が強まった事例。三つ目は、役員らに、新旧住民の参加が相まって生まれた一体感が、盛況をもたらした結果であった。

リーダーの主導性や住民の積極性が、コミュニティの維持や再生に不可欠であることは、一応明らかにしえたと思う。しかし、そこに認められた特性が、住民の主体性の強弱だけで説明するものではないことも明らかである。その背景にある、藩政期にかたちづけられた村落社会組織、集落の規模や機能の違いなどを考察する必要があるだろう。これらについては、今後の課題としたい。

現地調査にあたり、各神社の総代長を始めとする役員、宮司諸氏には大変お世話になった。また高橋純・岩谷宣行・山田淳一の大学院生（当時）には調査に協力をいただいた。研究を通して立正大学地球環境科学部岡村治先生には多くのこ

指導をいただいた。ここに記して御礼申し上げる。

(受付2005年10月19日)

(受理2005年12月21日)

## 注

- 1) 組を廓とよぶ地区もある。
- 2) 人口の増減を地区別にみると、1995年～2004年に増加した地区は、成沢(2,421人→2,657人)、小江川(1,465人→1,510人)、千代(534人→561人)、中央(798人→919人)の4地区のみである。
- 3) 総代長の下に副総代や会計総代をおき、これらを責任総代とする地区もある。
- 4) 役員数の規模をみると、総代長、会計総代、副総代(以上各1名ずつ)、地区(集落に相当する)総代6名、用番15名、合計24名からなる地区が最大である。
- 5) 1戸あたりの氏子料は神社により異なり、年額1,000円から6,000円と幅がある。もっとも多いのは2,000円である。なお、神社の収入は氏子料のほか祭典時の寄付、所有地の賃貸料、賽銭などがある。賽銭は盗まれることが多く、対策に苦慮している。

## 参考文献

- 新井 正・島津 弘・鈴木裕一(2002):立正大学熊谷校地の自然環境に関する資料,地域研究,43-1,25-32.
- 梅山和代(1984):関東地方における神社信仰の地域性と重層性,お茶の水地理,25,1-10.
- 大塚昌利(1986):埼玉県江南町の都市化と生産システムの変化—埼玉県江南町における工業の立地形態—,北埼玉地域研究センター年報,10号,19-29.
- 大塚昌利(1997)諏訪地方における「御柱祭」からみた地域社会の重層性,立正大学人文科学研究年報,別冊11号,

30-48.

- 大村 肇・福宿光一・澤田裕之・大塚昌利・川鍋幸三郎(1986):御岳山上集落の生活と機能,『青海市御岳神社御師集落文化財調査報告書』所収,東京都教育委員会,1-14.
- 小川一朗(1986):江南町の社会的施設の立地集積,北埼玉地域研究センター年報,10号,30-38.
- 黒川徳男(2000):埼玉県下における明治期の神社整理—伊奈町小針地区を礼として—,『埼玉史研究』,35,1-17.
- 江南町史編さん委員会(1996)『江南町史資料編5 民俗』,717-759.
- 埼玉県神社庁神社調査団(1992):『埼玉の神社—大里・北葛飾・比企—』,埼玉県神社庁,1500p.
- 埼玉県神職会大里郡支会(1984):『大里郡神社誌』,図書刊行会,528p.
- 下田憲一郎(1919):『大里郡郷土誌』,埼玉民報社,17.
- 澤田裕之(1986):埼玉県江南町における農業構造の変化,立正大学北埼玉研究センター年報,10号,8-18.
- 松井圭介(1995):信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分,地理学評論68A-6,345-366.
- 松井圭介(1999):金村別雷神社信仰の地域的特性,人文地理学研究,23,39-58.
- 松井圭介(2003):『日本の宗教空間』,古今書院,292p.
- 松井秀郎(1986):大里郡江南町における人口の変動と宅地化,北埼玉地域研究センター年報,10号,2-7.
- 三木一彦(1996):秩父地域における三峰信仰の展開—木材生産との関連を中心に—,地理学評論,69A-12,921-941.
- 歴史地理学会(2005):『歴史地理学』,(シンポジウム「宗教文化の歴史地理学」特集号,47-1,113p.

## Festivals of the Shinto Shrines and Commitment to the Festivals by the Inhabitants in Kounan Town, Saitama Prefecture

Tadanao MATSUO\* • Shota IMAI\* • Toshifumi KOHARA\*  
Wataru KIKUCHI\* • Masatoshi OHTSUKA\*\*

This paper will explain the festivals of the Shinto shrines and the commitment to the festivals by the inhabitants in Kounan Town. Since about 1960, communities have been disappearing, not only in the urbanized regions of Japan, but also in the rural regions. However, communities are important to secure the safety of neighboring areas and to support mutual aid at the time of unexpected accidents, etc. In former days there were various festivals to honor the tutelary gods and they were affective events to establish and maintain communities.

Kounan Town is located in the northern part of Saitama Prefecture and borders on Kumagaya City. This town is covered with rich forests, rice paddies and farms. It is a rural region from of old and agriculture has been extensively carried out, mainly the growing of rice and barley, as well as mulberry for sericulture. But since about 1960 the urbanized areas have been spreading due to the construction of ready-built houses, apartment buildings, factories, large stores, etc. As a result, the original inhabitants and the newcomers, who have moved from Kumagaya City and the surrounding areas, are now living together in this town.

Kounan Town is separated into thirteen districts, which were separate villages from the Edo era until 1889, and there are thirteen Shinto shrines, one shrine located in each district. Moreover, there are several small subordinate shrines situated in each shrine precinct.

Formerly many festivals were held at the shrines. On the festival days parishioners were treated to dumplings made of rice and bean jam at the shrines. At some of the shrines the ritual lion dance was performed, and portable shrines were carried and festival floats pulled, one after the other, through the area. When night came movies, variety shows and dramas were staged in the grounds of the shrines. The parishioners of the shrines were also active in religious associations. They visited the head shrines in turns, combining this with recreation.

Some festivals in this town have been revived of late. There are three types of summer festivals. The first type is a festival that has flourished due to the leadership of the head parish representative. The second type is a festival that has developed due to the efforts of parish representatives. These two festivals are supported by the original inhabitants. The third type is a festival that has been revived by the efforts of the parish representatives, and the active participation of the original inhabitants and the newcomers. Of course, this festival is supported by both the old and new inhabitants.

[keywords] 1 Shinto shrine 2 festival 3 community 4 local community involvement 5 Kounan Town

\*Graduate student of Geo-environmental Science, Rishso University

\*\*Faculty of Geo-environmental Science, Rishso University